

ベニバナヤマシャクヤク *Paeonia obovata* Maxim.

【選定理由】

個体数階級 3、集団数階級 2、生育環境階級 3、人為圧階級 4、固有度階級 2。個体数と集団数は各階級の下限に近く、ヤマシャクヤクよりずっと少ない。花が大きく、保全の必要性が高い植物で、園芸目的の採取により激減している。

【形態】

多年生草本。高さ 40～60cm になる。根茎は横にのび、太い根を出す。茎には 3～4 枚の茎葉を互生し、基部には数枚の鱗片葉がある。葉は 2 回 3 出複葉、小葉は楕円形～倒卵形、先は狭まってとがり、裏面は白色を帯びる。花期は 5 月、花は茎の先端に 1 個つき、直径 4～5cm で上を向いて開き、がく片は緑色、花弁は 5～7 枚で倒卵形、淡紅色で互いに重なり合っつく。めしべの花柱はやや長く、著しく外側に曲がる。葉裏は通常有毛であるが、ときに無毛のものがあり、ケナシベニバナヤマシャクヤク form. *glabra* (Makino) Kitam. と呼ばれる。

【分布の概要】

【県内の分布】

鳳来南部（小林 49314）、鳳来北西部（小林 46363）、作手（芹沢 79803）、稲武（芹沢 82934）、東栄からも記録されている（小林, 2006）。

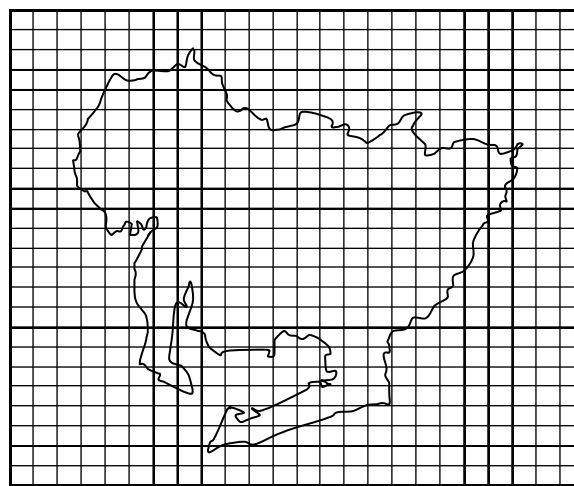
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

サハリン、日本、朝鮮半島、中国大陸東北部。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

ヤマシャクヤクと異なりやや草地性で、林縁などに生育することが多い。しかしある程度は耐陰性があり、造林地の中などに残存していることもある。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況 / 減少の要因】

もともとあまり多くない上に、園芸目的の採取により著しく減少している。山草愛好家に見つかれば、まず即刻絶滅である。ある場所では、山草愛好家の目を引かないよう、地元の人がつぼみをすべて摘みとっている。致し方ないことであるが、これでは植物は繁殖できない。

【保全上の留意点】

基本的には国民共有の資産である自然物を個人の庭に取り込んでしまう山草愛好家のモラルが問題であるが、このような道義的な訴えだけでは目前に迫る絶滅を回避できない。当面は秘匿以外に有効な手がなく、分布情報の公表に際し慎重な配慮が必要である。

【特記事項】

本書のベニバナヤマシャクヤクは、ケナシベニバナヤマシャクヤクを含むものである。

【引用文献】

小林元男, 2006. 北設楽の植物 p.45,142. 愛知県林業試験推進協議会, 新城.

【関連文献】

保草 p.217、平草 p.111、SOS 旧版 p.53、環境庁 p.291、SOS 新版 p.18,20.